

フェイ・バウンド・アルバーティ著（神崎朗子訳）
『私たちはいつから「孤独」になったのか』みすず書房（2023年）

今年4月、孤独・孤立対策推進法が施行された。制定の背景には、8050問題や孤独死、またコロナ禍を経た中で人のつながりの変容などがあるだろう。先例となったのは2018年に孤独問題担当大臣を設置したイギリスである。原著（原著出版は2019年）は、感情史を専門とするイギリスの文化史家が、不安を駆り立てる言葉として「孤独」（loneliness）が蔓延する中で、それを歴史的にとらえなおすことにより、孤独のもつ意味を提示している。

そもそも孤独は主観的にも客観的にも明確に指し示したり、測定したりするのが難しい感情（概念）である。著者はその理由として、孤独が単独の感情ではないことを挙げ、それを怒りや憤懣、悲しみ、嫉妬、恥、自己憐憫など様々な感情が混ざり合った感情の群（クラスター）として表現する。こうした複雑性をもった感情であるが、孤独は現代の国家や経済の文脈において、精神や身体の疾患を引き起こす一因であり、負担や「疫病」とみなされている。

しかし、現在の意味での「孤独（ロンリネス）」という言葉は1800年以前にはほとんど使用されていなかった。感情とは無関係に、たんに独りである状態を意味していた「ワンリネス（oneliness）」が、現代の病理学的な観点でのネガティブな感情を含意する「ロンリネス」へ変化していった。その背景にあるのは、伝統的な農耕型社会から近代を経て、より世俗化、グローバル化した現代社会に至る社会構造や人口動態の変動だけではない。近代的な孤独は、科学や哲学、産業において、集団よりも個人（世界よりも自己）が重視され、それが経済・政治構造や人びとの考え方に組み込まれるようになったときに誕生した。そして、個人と他者の断絶によって引き起こされた人間の精神の機能不全であるという、負の部分が強調されたのだった（第1章）。

著者は、特定の時期における個人に着目し、そして孤独をライフステージに応じて変化する感情群としてとらえ、それぞれの経験の複雑性を描いている。またその際、時代背景のみならず、各個人の階級やジェンダー、年齢や世代などの差異に着目する。アメリカの詩人で作家のシルヴィア・プラス（1932-1963）の日記や手紙における、慢性的な孤独を表わした「血液の病気」という言葉によって、感染症などの疫病として概念化されたポイントを示している（第2章）。また、「魂の伴侶」（ソウルメイト）の渴望や喪失に伴う欠乏感と孤独について、信仰に支えられていた18世紀のある個人店主（日記作家でもあるトマス・ターナー）が配偶者を喪ったときと19世紀の象徴的な寡婦（ヴィクトリア女王）があえて孤立感に浸ったときの経験の差（第4章）、また、自己と社会（あるいは欲望と慣習）の対立の中で生じる苦痛を耐え忍んでもソウルメイトを追及する価値があるというメッセージが現代の小説の中でも繰り返されていること（第3章）を指摘している。

孤独の側面として精神的なものだけではなく身体的な経験、物質と孤独の関係にも焦点が当てられている。高齢者に関しては、工業化以降、経済的な負債をもつひとつの社会集団とみなされ、現代では高齢者だけを集めた建築環境が一つの同質性を前提とした社会集団として識別させ、高齢者個人として孤独の意味について問うことが避けられてきた（第6章）。ホームレスについては、「住む家がない」という構造的な条件だけを意味するのではなく、物理的な安全や社会的な帰属意識の欠如を特徴とする感情的な経験であるという見方を示している（第7章）。物質文化と孤独の関連性について、形あるものを保持するといった形で帰属意識を持つのに必要な共通感覚をもたらす一方で、内的かつ個人的な意味では自己のアイデンティティを保持するために消費を続け、一向に“飢え”を満たすことのできない感覚をもたらすことなど、孤独にまつわるジレンマを指摘する（第8章）。

孤独が人間の存在をむしろ豊かにする場合もあるが、そのために重要なのはみずから選択できることであると、著者はいう。19世紀以降の作家を例にみると、内向性とソリチュード（solitude）は創造性にとって不可欠であり価値をもつが、それは“独りであること”をみずから選んだ場合だけである（第9章）。

著者は、現実的な理由から孤独を強いられるケースもふまえた上で、ポジティブな側面も含めて孤独の様々な見方を提示する。本書は、画一的な対策ではなく、孤独に付与されたステイグマ（“疫病”）を中和することによって、個々人の孤独のあり方へ向き合うことが重要であることにあらためて注意を促している。（長谷川 翼）